

史遊会通信

No.249号
平成28年
1月5日

編集
042-754-9360
arai-hiroshi@
jcom.home.ne.jp
新井宏

一月講演会の講演要旨予稿

「日下(部)」考

柴田 弘武

総会のお知らせ

日時 一月十六日(土) 午後三時～五時
会場 銀座ルノアール八重洲北口会議室
なお、総会の前か後に、例月のように講演会があります。

講演 柴田 弘武氏

テーマ 「日下(部)」考

今回は、講演要旨を「予稿」として掲載しました。

① 「くさか(べ)」とは何か

「日下部」「日下」「日部」「草壁」「草香」「草加」等と表記されるが、アイヌ語(縄文語)として次のように解釈出来るという。即ち前号で紹介した進藤治が、『「長髄彦」の実像』で、「kusarka(舟ク)で運(サ)ぶ(水域を渡る)、岸(カ)。つまり荷舟を着ける岸ということから「船着場」という意味になります」と述べているのである。そのほか鈴木健『縄文語からヤマト語へ』、吉田金彦『草枕と旅の源流を求めて』、大友幸男『江釣子古墳群の謎』等も同じで

② 『記紀』や『和名抄』に出てくる「くさか(べ)」地名はどういう所であろうか。吉田

ある。なお「部」について鈴木健は『茨城の縄文語地名』で「べ」は「…するもの」「…であるもの」を意味し、「クサカベ」は「渡しの船主であろう」と書いている。東伍の『大日本地名辞書』から二三ヶ所の「クサカベ」地名、六ヶ所の「クサツ」地名を調べてみた。その結果東大阪市の草香江址(現日下町)を始め、港湾施設があった所が圧倒的に多いことがわかった。従っ

③ では「くさか」をなぜ「日下」と書くのか？

て上記アイヌ語(縄文語)説は妥当であると考えられる。太安萬侶は『古事記』序文において「姓(うぢ)に於(おきて)日下(にちげ)を、玖沙(くさ)詞(か)ト謂(い)ふ。…如(かく)此(ある)類(たぐひ)は、本(もと)ノ随(まにま)に改(あらた)メ不(ず)と書いてるように、奈良時代にはもうなぜ「くさか」を「日下」と書くようになったのかが分からなくなっていた。

これに対して進藤治は、「日下」は日(ひ)の下(した)、日(ひ)の本(もと)から来たもので、太陽の上る下(した)、或は太陽の昇るところで東の方角という意味であることは、いわゆる「日の本考」等の立派な諸研究で今や常識となっていることで、枕言葉の意味は「東方のクサカ」ということになる筈です。九州、瀬戸内海方面から見て真東の終着陸地に当たっていたクサカという訳でしょう。と書いている。

谷川健一も『白鳥伝説』で、西宮一民の「日(ひ)の下(した)のクサカ」という枕詞的な修飾句がはじめにあった」という説に賛意を表した上で、草香江が「太陽の昇る難波、その東の日の下」に当たるところからクサカを「日下」と表記するようになったと書いている。但し谷川は「日の下」を「ひのもと」と読むのが正しいとして、「ヒノモトノクサカ」という言い方から、ヒノモトがクサカの地名をあらわすことになり、それをかなりあとになって日下という文字で表記したものである」と述べている。

これに対して鈴木健は『縄文語からヤマト語へ』で、「kusaka…日下(クサカ(大阪)。古くは河内の最東端入江の地で神武東遷の上陸地。草香をあてる。大和から

みて西||日下||日没の方向にあったので、のちに日下を当てたと思われる。「日(ク)下(サカ)江の入り江の蓮(ハチス)、花蓮」(記)。それはChuppok…西(chup(日) | pok(下)の直訳である。下(モト)、本(モト)と訓を同じくすることもあるので、日下||日の本||東とする説がある。しかし、日の出の方向(東||大和)に向かつて進撃するのは不利であると、神武がそこから撤退したように、そこは西である。「東漢(やまとのあや)」「西漢(かふちのあや)」(記)とあるように、大和が東、河内が西である。日の本は日の立ち上がるもとであり、chup kasi(日上||東)の方向である。日下は日が下に行くchuppok(日下||西)の方向である。と書いて正反対の解釈をしている。これをどう考えるか…。

自由執筆

三角縁神獸鏡の産地問題

昨年は「魏鏡説」が著しく後退

新井 宏

富岡謙三が、三角縁神獸鏡が魏鏡であるとしてから、間もなく百年になる。この説は、戦後、主要古墳間の三角縁神獸鏡の分有関係などから「小林理論」として完成され、三角縁神獸鏡が「卑弥呼の鏡」であることが「定説」となった。

ところが、昭和三十七年には森浩一が「魏鏡説」に対する疑問を唱え、昭和四十五年頃から、古田武彦、奥野正男らアマ系研究者から「国産説」が相次いで提出された。それでも考古学界は完全に無視していた。

状況が変わったのは、昭和四十六年に中国考古学界の大御所、王仲殊が来日し「呉の工人が日本で作った」との説を発表したことである。何しろ、中国の本場の学者が魏鏡ではないと否定したのである。

それでも、日本の考古学界は魏鏡説を維持し、新聞も若干の疑問符はつけながら「卑弥呼の鏡」として報道し続けている。

しかし実際には、今世紀に入る頃から、魏鏡説は防戦一方に追い込まれていたのである。従来、魏鏡説であれ国産鏡説であれ、銘文や文様など表面観察による研究が主体であったが、近年、鏡の製作方法や内部組成の研究が大巾に進展したからである。

実は青銅鏡というものは、複製する方法がたくさんある。だから、表面観察だけで、その製作地を推定することなど不可能のである。特に、三角縁神獸鏡は日本から既に五六〇面も出土しているが、未だ中国からの確実な出土例がない。大流行したのは確実に日本のみであり、ルイビトンの偽物のように複製鏡が製作された可能性が高いのである。

その意味で注目すべきは、三角縁神獸鏡の八〇%以上が同型鏡(同范鏡)だという点である。中国鏡にはほとんど同型鏡(同范鏡)は見られないので、三角縁神獸鏡だけの特徴であり、いわば大量複製技術なのである。

また、三角縁神獸鏡には表面に凸線キズという欠陥が認められるが、中国鏡にはない。見かけは同じであっても、内部品質、特に組成は製作地によって異なるかも知れない。

(1) これらの点に関して、近年の大きな進展は、中井一夫が鏡のキサゲ加工から、青龍三年鏡は踏返し鏡であることを論証したこと

(2) 鈴木勉が二層式鑄型(粗粒外型に細粒内型)を用いて凸線キズの再現に成功したこと
(3) 新井宏が、鉛同位体比の研究から、異なる年号鏡を後にまとめて鑄造していることや同時期の中国鏡との比較で、大部分が国産であることを論証したこと
などである。

王仲殊は最新の論文で、「日本の著名な金属考古学者新井宏氏が、三角縁神獸鏡に含まれる鉛同位体比率の測定に基づき、……三角縁神獸鏡が中国の「魏鏡」ではなく、日本で製作されたことを確認」と称賛してくれた。

さて、今年になってからの進展である。ひとつは、前出の鈴木勉が三角縁神獸鏡の鑄造後の補修痕を精密比較して、埋葬古墳毎に特徴が異なり、鑄造地が古墳に近いところにあったとしたことである。もちろん、これは国産説の決定版である。

もうひとつは、奈良橿原考古学研究所が昨年未だ読売大ホールで開催した公開講演会「三角縁神獸鏡研究の最前線」で、凸線キズの研究から、三角縁神獸鏡の「舶載鏡」が誰もが国産鏡と認める「仿製鏡」と、同一の鑄型(外型)で作られていたことを明らかにしたことである。「舶載鏡」も国産であった。

筆者もこの講演会に招待されて参加したが、所長の菅谷文則は「国産説」を唱える。しかし、発表者はなぜか歯切れが悪かった。

また、これも年末のことであるが、朝日新聞は、三角縁神獸鏡が魏の都のあった洛陽で見つかり、西川寿勝が検分して、三角縁神獸鏡に間違いないと報道した。中国から一枚も出土していないと云う「魏鏡説」の弱点が解消された訳であるが、古物商から入手した経過から他紙は無視している。

筆者が見る限り、これは「本物」かも知れない。それは、日本ではほとんど類例のない二十^号以下の直径鏡であり、福永伸哉が三角縁神獸鏡の特徴として挙げる「長方形鈕孔」ではなく、「円形鈕孔」だからである。

三角縁神獸鏡の「祖型」が中国にあったことは、おそらく間違いない。しかし、大流行した日本で、そのほとんどが複製されたと云うのが「国産説」なのである。

だから、中国で三角縁神獸鏡が続々と発見され、日本の三角縁神獸鏡と比較できる日が来るのを待っていた。

(本稿は『日本計量新報』の新年特集に掲載したものである。余白の関係で転載した。)

自由執筆

ギリシヤの債務危機

お金でギリシヤの軍事拠点化

安田保之

ギリシヤと言えば、民主主義政治のルーツとして世界が古代ギリシヤを懐古し、敬意を払って来た国だが、ここ数年来財政面で窮地に陥っており、ヨーロッパのお荷物と言う存在になっている。

今年もヨーロッパ同盟（EU）および国際通貨基金（IMF）等の国際機関に、改めて債務の一部カットと資金供給増額の支援を要請した。この支援要請に際して、ギリシヤは無礼にも開き直って恫喝した態度をとり、ユーロ通貨同盟からの離脱をほめかして交渉を重ねた。しかしかえって、ドイツをはじめ北欧諸国から痛烈な非難を浴びて、結局従来に増して厳しい緊縮政策を課され、資金供給増額を受けることで落着いた。この交渉の結果は同国にとっては非常に屈辱的なもので、国民の自尊心を相当に傷つけられたのではないかと思う。

同国は古代より超長期にわたって、ローマ帝国・東ローマ帝国およびオスマントルコ帝国の支配下に置かれ、一八三二年にオスマントルコから独立したが、その後もイギリス、ロシアおよびドイツの信託管理下で王政を敷き、実際の自律的政治システムを確立するのには、一九七三年に王制が廃止されて共和制が出来るまで待たねばならなかった。

現在の共和制体制はまだ四〇年あまりと歴史が短く、政治はポピュリズムに走って混乱状態にあり、主要産業も海運業と観光業に限られて、古代ギリシヤの栄光の片鱗はもはや全く見られない。従って国民の生活は大概EUとIMF等の国際機関およびその他の海外金融機関からの借り入れに依存したものに なっており、財政はいわゆる「サラ金」状態と言っても過言ではない。

国際経済の観点に立てば、このような同国が見捨てられても、経済規模および機能も比重が小さく、EUに与える影響はほぼ無視できるものである。然し今回のEUとIMFの同国への支援は、財政の再建をかすかなる望みとし、本当の狙いは地政学上の軍事的な価値に重きを置いたものであろう。即ち歴史的且つ地理的にみて、現在のロシアを東西冷

戦時代のソヴェエト連邦に、そして現在の中近東・北アフリカの諸国をサラセン・オスマントルコ帝国時代のイスラム勢力に見立て、同国の存在をEUの陸上と地中海の海上の防衛の軍事拠点としておきたいというEUの本音が明らかである。

同国は厳しい緊縮政策を続けているが、経済成長を促す政策も又新産業を生み出す機運も全く無く、財政の改善の見通しが殆どないまま、年の経過とともに財政支援の交渉を蒸し返し、最終的には破綻に追いやられるだろう。EUとIMFは、今は状況を静観しているが、彼らは現在のロシアの強硬な覇権主義的外交政策およびイスラム勢力との宗教と文化面での衝突の危険性の急速な高まりを認識し、債務の一部カットの容認という金銭の贈与で、同国の軍事拠点化を具体化して行くのである。そして約二〇〇年前の独立時と同じように、再びEUの複数の有力国の信託管理下の政治システムに逆戻りして行くと考ええる。

今のヨーロッパの政治の流れは何となく世の神聖ローマ帝国を連想させる事象で、今後の動向を注視して行きたい。

自由執筆

シルクロード見聞録④

武威市と「馬踏飛燕像」の発見

慕史堂 中込勝則

武威は、漢の武帝が、霍去病などの活躍で匈奴を追い払った後にこの回廊においた河西四郡の一つである。そのいちばん東におかれた街で、むかしは「涼州」とよばれた。ここは、南につらなる祁連山脈の高山からふき下ろす風の影響で、河西回廊地帯でも涼しいところとされ、この名がついた。

「武威」とは、霍去病が匈奴に大勝利し、武帝の武の威力が、この地におよんだことを後世に残すためにこの街につけられた。「武力による威勢をしめす」といういさましい名前である。漢時代以後も、河西回廊の重要な街として、五胡十六国時代には、前涼・後涼・南涼・北涼の地方政権が都をおいた。

現在の武威市の人口は一九〇万人、河西回廊でいちばん大きな街だ。街は工業都市として発展している。クレーンが随所に立ちならんで、工場や住宅の建設が盛んだ。中国内地からの工場労働者の移住も多く、家族を遠い

他省の村にのこして単身で働きにきている人が多いという。

一九六九年にこの街で大変なものが発見された。武威市街から北へ一kmのところに雷神廟がある。雷さまをまつた土壇だから雷神という。東西六十m、南北一〇六m、高さ八・五mの土壇の上にたてられた道教の廟である。この廟の地下に墓があり、その中から後述のような素晴らしい青銅製の馬や軍団が発見されたのだ。

当時は中ソ冷戦時代だったことから、このあたりの農民がソ連軍の攻撃にそなえて防空壕をつくろうとして、この土壇の脇を斜め下に掘っていったところ、後漢時代の、大型の煉瓦で内部をつみあげた墳墓がみつかった、その中からすばらしい青銅の像が発見されて一躍有名になった。

墓室を見学するには、土壇の右わきにトンネルが掘ってあり、なかにスロープ道が造られていて、ここから入っていく。墓の内部には三つの部屋があり、三つの部屋は、大人が腰をかがめてやつとはいれる低いくぐりぬけ穴でつうじていて、うっかりすると頭をぶっつけそうだ。墓室が一番奥で天井高約六m、広さは人が十二、三人も入れればいいだ。

ここにお棺があつたのだが、いまは何にもない。発見当時は、銅銭などがちらばっていたという。ふたつの前室には、副葬品として、馬踏飛燕像や軍団のミニチュアともいえる馬三十九頭、人物四十五体、牛一頭の青銅製品がおさめられていた。この中で、最も目をひいたのが青銅製の奔馬で、高さ二十四・五cm、体長四十五cmあり、天馬が走りながら燕を踏んでいる像である（「馬踏飛燕像」）。速く飛ぶ鳥の代表格である燕を踏みつけるほど速く走る馬だというわけだ。これは郭沫若さんが命名した。

この「馬踏飛燕像」は、かの武帝が欲してやまなかつた天馬を模したもので、そのりりしさと首をすこし左にかたむけつつ疾走している躍動感は、いままでに中国全土から出土したおびただしい青銅製品の中でも白眉といつていい。「馬踏飛燕像」は国家一級文物に指定され、兵馬俑などとならぶ国宝となっている。また、中国政府は、この奔馬マークを中国旅游局のシンボルマークに指定している。

同時に発見された軍団の馬三十九頭、人物四十五体、牛一頭の青銅製品も、きわめて写実性にとんだ青銅製品で、「馬踏飛燕像」に劣らない見事さである。これらの実物は、現在

は蘭州の「甘肅省博物館」に展示されていて、蘭州に行けば見学できる。

この墳墓は、後漢時代にこの地を治めていた張某という将軍が生前から自分のためにつくった墓である。そしてこの存在を盗掘から守るために、墓の上に八・五mもの土壇をきずき、そのうえに雷さまをまつる廟を建築してカモフラージュした。だから、この場所は、ながいあいだ、土地の農民たちの雷さま信仰の社だった。思うに、発見されたころは、土壇はただの小山にしか見え、上の雷神祠も崩れかけていたかもしれない。荒れはてた状態だったのであろう。そうでなければ、いくらなんでも、神様をまつった土壇の横つ腹に防空壕を掘ろうなどと考えるわけがない。

それがこの重大発見以降、周辺は雷台公園としてきちんと整備されて、入口には立派な門がつくられていて、ひろい前庭があり、その見上げるほどの高い塔の上には、「馬踏飛燕像」のレプリカが馬の等身大につくられて躍動するすがたでかざられている。また、雷さまをまつった土壇にいたる通路の途中には、軍団のミニチュアともいえる馬三十九頭、人物四十五体、牛一頭の青銅製品の人馬の等身

大のレプリカがコンクリートの池状のなかに整然とならべられている。

いまでは、雷さまをまつる社殿や門も随分立派なものが建てられている。土壇も周囲を石組みで覆い、社殿にもうでる階段もきれいに整備されている。公園内には、牡丹の季節とあつて、牡丹がいまをさかりとピンクに咲きひらき、目をたのしませてくれた。

ただ惜しいことには、この墓も多聞に洩れず盗掘にあつており、そういわれて見上げれば、墓の天井のすこし下に、人間が一人くぐれるほど大きさの穴をあけられたと思える部分があつて、そこだけは周囲のレンガとはちがう普通のレンガでふさいである。

専門家に言わせると、もともと、この墳墓は、煉瓦の築造技術は高く、墓の内部は焼き煉瓦が積まれ、アーチ型につきあげられた煉瓦が簡単にはくずれないような構造になっている。すなわち、力が一点に集中するアーチ型天井部分のレンガはひとまわり大きくて、且つ、かたく焼き固められたものが用いられているという。

ここを盗掘した人間は、この墓の力学的な構造を知っていて、天井の、力が集中する個所のレンガをはずせば、墓は一挙に崩れ落ち

る恐れがあるから、天井からすこし下にさがつた部分に穴をあけて泥棒に入ったのだ。ということは、この墓に入った泥棒は、墓の造成に携わった人間だろうという。造成後あまり時がたたないあいだに盗掘されたのだ。

この墓をつくれるほどの張という将軍は、当然に、墓にたくさんの財宝も収納したであろう。泥棒は、ここに収められていた金銀・玉などの財宝を奪うだけで満足し、現在われわれが目に見えている、「馬踏飛燕像」や軍団のミニチュアともいえる馬三十九頭、人物四十五体、牛一頭の青銅製品などは重いから、あけた穴からもちだすのは大変なので、中に残したのであろうといわれる。国家一級文物に指定されるほどのものが残っていたのは幸いだった。墓の内部の積み上げられた煉瓦一枚一枚には、当時の人々の生活などが画かれて、いまでも朱や黒などがあざやかに残っていて、当時の生活様式をしるには興味ぶかい。